
<お試し版> 満咲高校騒乱記

瑛彪・玄彪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

<お試し版>満咲高校騒乱記

【Nコード】

N0232B

【作者名】

瑛彪・玄彪

【あらすじ】

大好評「熊鷹高校騒乱記」1、2話の改定版。生意気がきんちよ：アキラが忍び込んだ夜の高校は、月光すら拒む暗黒の世界。その禁断の領域で、目にしたモノとは……。果たして、アキラの運命やいかに！ やつと復活、瑛彪の最新作お届け！！

「壱」 頑固一徹の 1。

夜。

今宵は満月。

月夜の中、桜がほわりと浮いている。

その桜の陰にもまた桜。

そのまた後ろにもまたまた桜。

月の光の中、桜は延々と続いている。

幻想的な桜の白いトンネル、その下を、二つの小さな影がくぐっていく。

「アキラ（あきら）・・・やっぱり、危ないんじゃないかな？」

歩いている2人のうち、ふわふわ頭の方が気弱な声を出す。
それを、もう1人のツンツン頭の方が睨む。

「なんだよ^{くたに}久谷いゝ。いまさらびびってんのかよ。

行こうと云ったのはお前じゃないか」

「だって、」

ふわふわ頭の久谷は、うるうる視線を向ける。

「やっぱり、夜の学校は怖いよ。あんな噂もあるし・・・」

「その噂を確かめようと云ったのもお前だろ」

ツンツン頭のアキラがつんけん^い云い返す。

「だって、アキラがみんなに向かつて『そんなの絶対嘘だ!』って云いはるだもん」

「だってмокそもない!」

アキラは吐き捨てるように云った。

「『人を食う学校』なんて信じられるか!」

「貳」 遮二無二の 2。

彼らが目指している桜並木の先、そこには『県下一美しい学校』と同時に『人食い校舎』で名高い満咲高校がある。

満咲町では、夜中の満咲高に入ってはならないという掟がある。なぜなら、次のような云い伝えがあるからだ。

夜、満咲高校の校舎に入った者は、それつきり帰ってこなくなる

親の親、そのまた親の世代の前から伝わる、たった一言の怪談である。行方不明の原因の詳細までは伝えられていないし、そもそも高校ではそのような行方不明や失踪事件が起こったためしもない。謎めいた掟と怪談だが、それこそが満咲高を『人食い校舎』と呼ばせしむる所以である。

しかしここ最近、この町お馴染みの『人食い校舎』がこれまでにないくらいの脚光（？）を浴びている。怖い話ブームが加熱している満咲町の小中学生で、格好の話題となっているのだ。詳細が語られないがゆえに、若い好奇心や妄想がふくらみ、上記1行の怪談にあらゆる尾ひれハヒレがつきまくり、異形の姿で彼らの間を泳ぎ始めた。そのうち、手足が生えてきて上陸するのでは、というぐらいその怪談の成長っぷりは凄まじい。

アキラたちのクラスでも例外ではなく、その話で持ちきりだった。

「夜の満咲高では人体模型がうるついでいて、そいつに捕まると皮や肉をはがされ、自分も人体模型にされてしまう」

という生なましいホラー話や、

「夜になると満咲高の校舎は迷路に切り替わる。そこに迷い込んだら一生出られなくなるんだ」

というガウディ仰天の建築思想や、

「いや、やっぱり校舎も腹がすくから、人間を食べちゃうんだよ」

なんていう無垢で小学生じみた話を、真剣な顔で休み時間中話している。

そんな状態に、嫌気を差した「クラス一冷めた男」を自負する熱い子供；アキラが、「ばかばかしい、常識的にそんなのありえない」と云い切ったものだから、クラス中が大騒ぎ。クラスメイトほぼ全員を敵にしまった彼を救うべく、久谷が苦し紛れに「夜、その校舎に入ってくればいいんだよね」とみんなへ提案した結果、今に至るのだ。

そのいきさつを思い出すだけでもアキラは腹立たしくなる。

あの怪談のせいで俺は――

「そろそろ着くよ」

はっと、久谷の声で我に返る。

「もうこうなったら・・・」

アキラは唇をきゅつと噛むと、桜並木の終点、満咲高校の校門に向かって走り出した。

「暗い中走ると危ないよ」

久谷が注意するのにも耳を貸さない。

アキラは、腹だたしさ全てをエネルギーに変換するがごとく、突進していった。

校門は、桜に埋もれるようにして、静かに夜の訪問者を待ち受けていた。

それは、まさに「拒絶」という言葉が似つかわしい代物だった。

その黒光りする鉄の塊は、たとえ錠が下ろされていなくても、子供一人の力では到底動かすことはできないだろう。高さも、アキラの背丈の3倍ぐらいある。それが、威厳を持ってアキラを見下ろしている。

「よし！」

逆境こそ燃える性格のアキラは、ぶるりと武者震いするなり、校門に飛びつく。門扉はギイともしない。アキラはするすると鉄柵に登り、あっという間に門の頂点に到達した。

そのまま敷地内へ飛び降りようとして門扉の天辺に手をかけたとき、その手のひらに引つかかる感触に気づいた。錆びているわけでもないのに、門がざらつくのだ。目を凝らして手元を見ると、そこには古代文字のような模様が刻まれていた。

「なんだ、落書きか？」

ふと見下ろすと、登ってきた門扉の鉄柵一本一本にも、その繊細な文様が掘り込まれているのが見える。しかも全て全く同じ文様。

いたずらにしては手が込みすぎている・・・！

ことの不気味さに、全身の毛が逆立った。

理屈ではわからないが、本能でわかる。この学校には何かある！

このような状況下で取られる行動は、主に2つ。危険を感じて身を引くか、興味を感じて踏み出すか。このアキラの場合は――

即座に、門の天辺から飛び降りた。 構内の方へ。

飛び降りる瞬間、アキラは妙な感覚にとらわれた。まるで、永遠に底なし穴に落ちていくような、冷やりとする感覚に。

しかし、それを感じたのはほんの一瞬で、唐突に地面の感触がきた。地面の衝撃といってもいいかもしれない。アキラは一瞬前の妙

な感覚に氣をとられてしまつて、着地し損ねてしまった。

「あてててて・・・」

頭を上げたアキラは、目の前の光景に目を奪われた。

煌々と、月が照らし出す白亜の校舎が、彼を眺め下ろしていた。

さすがは「県下一美しい学校」と謳われる、満咲高校。月下の姿には、息を呑むばかりである。

それは鏡のような湖畔に降り立った白鷺のように壮麗優美であり、銀の砂漠にそびえ立つ白象のように荘厳であつた。

「すげー・・・」

しばらく見とれていたアキラだったが、ふと氣がついて門を振り返る。

「あれ・・・久谷？」

後ろを歩いていたはずの久谷の姿が見えない。

前にも後ろにも、横にもいない。

360度見渡したが、彼の姿を発見することはできなかった。

「これを登れなかったのか？」

門が登れないなら「手伝ってよ」とか「やっぱり帰ろうよ」とか泣き言を云う奴なのに・・・。

「ま、びびって逃げたんだろう。
とつと用を済ませて帰ろ」

自分に云い聞かせるように独りごち、服についた砂埃を払う。
ぱんぱん、という布の音が構内にこだまする。

「・・・」

あたりは、しいんと静まり返っている。

改めて、孤独を感じる。

久谷が逃げても、俺は任務を遂行する。
もう、後には引けない。
行くしかない。

アキラは校舎に向かって足を踏み出した。

「参」 冷汗三斗の3。

校舎の戸は予想通り、どれも固く閉まっていた。

しかし、今夜のために、彼のクラスメートの兄が自分の教室の窓の鍵に細工して、外から開くようにしているはずだ。

そう、これはクラス中が仕組んだ肝試しなのだ。

『満咲高校怪談完全否定発言事件』の後、さっそく怪談信者たちがミッションを突きつけてきた。しかし、それはまた非現実的・フアンタジックな使命で、「学校のヌシを捕まえて来い」だの「動く人体模型を生け捕りにして来い」だの、アキラの怒りの火に油を注ぐものばかりだった。

そんなアキラに代わって、クラスメイトと交渉したのは久谷で、彼の努力の末、『予め鍵を開けておく窓から校舎に侵入し、証拠として校長室前の花瓶を取ってき、それを翌日クラスに持ってくる』という実行可能性の高いものに納まった。

「窓に細工？ だったらその兄とやらが夜に行ってくればいいじゃないか」というアキラの反論も空しく、ミッション決行となったのだ。

それにしても、なかなか窓が開かない。

校舎の右から2番目の教室だと聞いていたが・・・その教室の窓はどれも開かなかった。

（右から2番目の”窓”と聞き間違えたかな？）

アキラは一番端の教室の右から2番目の窓を揺さぶった。

開かない。

じゃあと一番端の窓を揺さぶった。すると「パシッ」と音がしたので、思わず手を引っ込めた。静電気か何かかな、と思って恐る恐る窓に手を掛けると、するりと開いた。

「ぜんぜん違う場所じゃないか。全く」

ひょいっと窓をくぐって、教室に潜入成功。

しかし教室は驚くほど暗かった。目隠しをしているように真っ暗なのだ。

しょうがないので手探りで前に進むが、それでも体が机や椅子に引っかかる。

警備員に見つからないよう、音を立てずに行きたい所。神経を酷使して、そろそろと進む。

なんとか教室を出たころには、どっと疲れてしまった。

おまけに廊下も真っ暗である。

「げー、かんべんカツオ」

とは云いつつ、壁伝いに歩くと意外に楽に進めることがわかった。廊下の方が障害物がない分、いくらかマシなのだ。

「確か、校長室は教室で右行つて、左だったよな」

アバウトな説明を思い出し、廊下を進んでいく。

が、はた、と足を止め、改めて辺りを見回す。

暗くて肉眼で見ることができない廊下の先。
真っ黒に塗りつぶされたような窓ガラス。
それはアキラの両脇、前後を囲んでいる。

違和感。

そう、今宵は満月。

なぜ、月明かりが届かない・・・？

アキラの全身の毛穴が、ぶわつと開いた。

怖い。怖いが、

おもしろいじゃないか。

アキラはきゅっと唇を噛むと、再び前進を始めた。

先ほどの神々しさと一転して、校内は黒く沈んでいる。

純白の羽毛が抱いているのは、月光すらも拒む暗黒の世界。

その闇の深さを、アキラはこれから知ることになる。

「四」 シ中求活 の 4。

進む廊下の奥に、緑がかった光が見えた。

（非常灯・・・）

その仄かな光にほっとした途端・・・薄明かりの下で、幽かにうごめくものが見え、反射的にアキラは警戒態勢に入る。

頭では、クラスメイトがいたずらしているかもしれない、とか、警備員かもしれない、とか考えようとするのだが、体——本能が危険を察知して硬直する。さっき、門のところで感じた、ただならぬ感覚だ。

もつとよく見ようと目を凝らせば凝らすほど、視界がぼやける。頭を振って、改めて周りを見渡すと、辺りにうつすらと白い靄もやが漂い始めているのに気づく。

靄は次第に濃くなり、辺りが乳白色となる。

（なんなんだ、いつたい・・・）

自然と姿勢が低くなり、壁にへばりつく。

ドキドキする胸を押さえて、非常灯の明かりの方を、じっと見まもる。

すると靄の奥に、ゆらりと人影が現れた。

人影はゆつくりと、アキラの方へ近づいてくる。

髪が長く、異常に長く、まるで頭から黒いワンピースを被っているように見えるほど長い。それがぼそぼそと呟きながら廊下を進んでいく。声音からして、若い女だ。

靄は、極微小な羽虫のように宙を自在に舞う。靄は彼女の周りが一番濃い。彼女の漏らす声に、靄がたかっているのだろうか。さながら、虫の屍骸に群がる蟻の如く・・・。

不意に、女が歩みを止めた。

それはアキラの前だった。

アキラはじっと、食い入るように、女を見つめる。

(どうするどうする・・・)

バクバクバク脈打つ心臓の音を漏らさじと、息を止める。

静止するアキラと女。

動くのは、靄だけ。

耳が痛いほどの静寂。

唐突に女は云った。

『・・・くるしいの』

溜息のような女の声に、アキラは飛び上がりそうになるのを懸命にこらえる。

『くるしくて、くるしくて、』

云ううちに、口調が激しくなる。女が身をよじる。長い髪が乱れて、靄に舞う。

『くるしくてくるしくてくるしくてくるしくて』

よじってよじって、1回転、2回転・・・これはもはや人間業ではない。

とっぴな状況で思考が麻痺し、アキラはただただ、ねじれていく女を見ていた。

『くるしすぎて、』

ぴたりと動きが止まる。

『たまらないの』

ぐるりと体を回して、前——進行方向に向き直る女。
すだれのように垂れた髪の中で、女の横顔がふいに歪む。

『・・・そこに、いるのだろうか?』

女の言葉に、アキラは縮み上がった。

「伍」 五里霧中の 5。

「はい、ここに。」

返事をしたのはアキラではなく、アキラより随分幼い子供の声だった。

高校。しかも、夜の満咲高校の廊下で子供の声がするとは、体をよじりまくっていた化け物がいるのと等しく奇妙な事態である。

『まあ、めずらしい・・・』

女がぐるっと首を回転させる。首を傾げるといったところか。

『いままで気配を殺していたのに、きゆうにしゃべりだすなんて・・・』

「あれ、いるのバレてました？」

親しい大人と喋るように、子供が笑う。
その声は鈴の音とまがうほど愛らしい。

『何か、こそこそとはいまわる、ネズミみたいなものがあるのは感じていたわ・・・』

独り言のように、女は続ける。

「ネズミかあ、それはあんまりだあ」

声は、廊下の先、靄の中から聞こえてくるようだった。
女はじつと、その方向を見つめている。

『そうよ、あなたたちは息をひそめて、まちぶせしているの。
まちぶせて、わたしたちを殺そうとしているの・・・
みっちゃんも、たっちゃんも殺された・・・
そうよ、そうよ・・・』

黒髪の際間に、鋭い牙が覗いた。

『あなたたちは人殺し・・・っ!』

そう呟いた途端、女の髪がぶわっと宙に広がり、その長く細くねじれた体が露わになった。

まるで、黒い翼の生えた蛇のようだ。

『わたしがこんな姿になったから、
見るにたえない姿になったから、
殺しにきたのね・・・!!』

叫ぶ口から、燃えるような紅が見える。

「いえ、違います。
殺しに来たのではありません」

子供が静かに応える。

『いたくてここにいるわけじゃないのに、きたくてここにきたわけじゃないのに、』

女がまた身をよじりだす。

『いきたくてここにいるわけでも、死にたくてここにいるわけでもないのに！』

彼女が怨の言葉を繰り返すたび、体をねじるたびに、彼女の体が伸びていく。

『わたしは、わたしは・・・
こんな体になりたかったわけじゃないの
殺されるために生まれてきたんじゃないの
くるしむためにいきているんじゃないの！』

着物から覗く手、左右に振る首筋に、鱗がぞわぞわと生えはじめる。

両眼の中の瞳は、縦に細長くなる。
彼女の言葉が、彼女の体を変化^{へんげ}させる「呪」になっているのだ。

『ああ、くるしい
くるしい
くるしい
くるしいのおおおおっ！！』

喉が裂けんばかりに叫んで、ぴたりと前に向き直る。

『くるしくてたまらないの』

繰り返し。

この女はずっと同じことを繰り返して云っているだけ。
同じ時を繰り返しているだけ。

生きるのが苦しい。

でも、シぬのが嫌だ。

しかし、生きるのが苦しい。

それでも、シぬのは嫌だ……。

彼女はこの終わりなきスパイラルから、自力で脱出することが不可能になっている。だから――

「もう、終わりにしましょう」

靄の向こうから、歌うように語りかける子供。

『殺さないで』

後ずさる女。

「私たちは、殺しに来たものではありません。
あなた方のように苦しんでいる人たちを、
出口へ案内するだけなのです」

声が聞こえているのかいないのか、女は、なお後ずさる。

『いや、いや、殺さないで……』

そんな女に、ゆっくり、噛み砕くようにして、子供が云った。

「いかな私どもでも、死んだものは殺せません」

女の目が、口が、ぱくつと開く。
同時に、廊下を絶叫が貫いた。

びりびりと廊下の窓ガラスが震える。

悲鳴を上げたまま、女が突進する。 前方へ、子供の方へ。
すると、あたりの空気に衝撃が走った。まるで、放電のような、
一瞬の炸裂だ。

『っ！！』

声にならない悲鳴を上げたのは女だった。
火花をまき散らしながら、弾かれた体を後ろに倒した。

『かべか！？』

戸惑って、前を向く。
しかし、そこには何も無い。ただ靄が漂っているだけ。

「今だ、夏生^{なつみ}！」

子供が叫ぶ。はつと女が振り返る。

後ろから人影が、女に切りかかるところだった。

「陸」 六道輪廻の6。

振り下ろされた鉄棒が、甲高い音を上げて床にめり込む。
続いて人影の舌打ちが聞こえる。

間一髪で身をかわした女、その間合いに、人影自らが入る格好になった。

攻守一転。

ここぞと女が噛みつく隙を与えず、人影は俊敏に身を引く。
靄に埋もれる白いシャツ。それは制服を着た高校生だった。

『あら、』

女はぐいつと首を伸ばして、高校生――夏生なつみの顔を覗き込む。

『あんな棒で、わたしが倒せるとおもって?』

夏生は不敵に笑む。

「強がんなよ。ギリギリ避けたくせに」

カッとした女がその首を喰いちぎろうとする前に夏生は、廊下の端に跳びずさる。跳びずさってもなお目は獲物を見据え、口には笑みを湛えている。おもちゃを見つけた子猫のように、キラキラと輝いて、残酷な表情だった。

その口が、もごもごと動く。

『うつつ
』

女はうめいたかと思うと、廊下にはったり倒れこみ、床の上で悶え始めた。

続きを云わせまいと、必死で首を夏生に突っ込もうとするが、再び火花で弾かれる。弾かれた首が、反対側でまた弾かれる。はったした女は、辺りを嗅ぐように、ぐるりと首をまわした。

『ここもここもかべが・・・己!』

その間も夏生は口の中で唱え続ける。

『うるさい！ うるさい!!』

女がぐるぐると暴れ回る。囲まれた見えない壁にぶつかり、あちこちで火花が散らす。

やがて靄がゆるゆると回り始めた。

夏生の呪文が呟きから声になるにつれて、靄の動きが速く強くなる。

よく見ると、靄は棒を中心に渦を巻いている。

それは竜巻のようになり、もはや女の体をも翻弄し始める。

『ああ、くるしいの！

くるしいまま生きたくないの
くるしいままシにたくないの

ああ、くるしいの——』

女のせりふもぐるぐる回る。

夏生は、そんな女を食い入るように見つめていた。

口元をきゅつと結ぶと、右手を上げて、真っ直ぐ女を指す。一瞬空気が凍る。その空気に夏生が喝を入れる。

「エン！」

すると、爆音が轟いた。同時に女の目、口、鼻、耳、毛穴、穴という穴から炎が噴き出す。女の中で何かが爆発したのだ。

「その思い、ここで全て燃やして往け」

炎を上げる女に、夏生が言葉を投げる。それに応えるように、炎はさらに勢いを増す。女の体から、靄に燃え移る。

漆黒の間をなめる真紅の炎。

その色は怖ろしいほど美しかった。

広がる炎は、やがて形になる。女を中心とした、半球状だ。彼女の云う「かべ」の形、すなわち結界の範囲である。

真っ赤な炎の中で、女のシルエットが崩れた。焼き尽くされ、ちりぢりになったのだ。

「クアイ！」

夏生が炎に向かって水平に空を切る。

炎が瞬時に消え失せた。代わって、ぽうつと小さな光が現れた。女のいた場所に、ふわふわと漂っている。

その光に向かって夏生が話しかけるように、呪文を唱える。低く、時に高く、あくまで静かに・・・それは言葉というより、唄、それも子守唄のようだった。

「・・・。。・・・*：・・・、：*：。。・・・*：・・・
：・・・。。・・・*：・・・」

何か云っているのは、はっきりわかる。しかし、何と云っているのかわからない。発音自体がこの世界のものではないような、不思議な響きだ。

小さな光は、ふよふよと夏生の方へ吸い寄せられ、夏生の差し出す指にとまる。夏生は、その光に空いている方の手をかざす。

「いつてらしゃい」

手を放すと共に、光がふわぁっと散り、消えた。

辺りに再び闇が戻った。

その闇の中で夏生が呟く。

「・・・次の苦しみへ」

「漆」 七言絶句 の 7。

しばしの沈黙の後に、ぽつと蒼い炎が宙に灯る。夏生の手のひらの上だ。

夏生の目は、照らし出された侵入者をしっかりとらえていた。

「おい、お前」

廊下の端でカチコチになっているアキラが、ビクツと飛び上がる。夏生が無表情に、つかつかつかと歩み寄る。

アキラの脳裏に、先ほど火あぶりになった女がよぎる。
一難去ってまた一難。

やばい、燃やされる・・・！

へたり、とアキラは腰を抜かした。

夏生の手がすつと近づく。

観念してぎゅうつと目をつぶるアキラの耳に、夏生の静かな声が聞こえた。

「高校見学なら、昼間来な」

目を開けると、眼前に、華奢な白い手が差し出されていた。
見上げると、夏生がこちらを見つめていた。
白いおでこに、さらりとかかる黒い髪、切れ長の黒い目。
黒いのに、黒以上に深い色の瞳。
思わずアキラは見とれてしまった。

「ほら、どうした」

手を差し伸べている夏生がせかす声に、我に返ったアキラ。

慌ててその手を掴んだ。

氷のように冷たい手だった。

「見ての通り、夜のこの学校は危険だ」

立ち上がったアキラから手を離す夏生。

「さっきは俺が予め結界張ってたから、何とかなった。

もし、俺が結界を張るのが遅れていたり、お前が結界の外に出ていたら・・・」

「たら・・・？」

睨む夏生の気迫に、ごくりと生唾を飲むアキラ。

「『彼女』の餌になってただろうに」

「・・・っ！」

震え上がるアキラを「ふん」と一瞥し、廊下の奥に呼びかける。

「喃っ、お前もお前だ。

わざわざ攻撃するタイミングを教えなくていい」

「はい」

先ほどの子の声が返事して、とことこと足音が近づく。それが夏生の足元まで来て止まる。

炎の照らす光が届かなくて、その姿は闇に埋もれたままだ。

「あなたたちはいつたい・・・」

アキラは、がくがくと頭を縦に振った

夏生の顔と足元を交互に見ているのだ。

「さっきこいつが云ったろう?」

夏生は自嘲的な表情を浮かべて云った。

「俺たちは迷える魂の案内役だ」

「案内・・・?」

「この閉じた空間から、元の、いるべき場所へ、『彼女』たちを送り出すのさ。」

「さっきみたいにな」

「?????」

話についてこれないアキラに対して、夏生は鼻で笑う。

「・・・まあ、ガキにはわからん話だろう」

「夏生の説明の仕方が悪いんだよ」

喃が怒った口調で夏生をたしなめる。

「これで理解できなければそれまでだ。
説明する気もないしな」

そういう夏生を無視して、喃がアキラに説明し始める。

「あのね、わかりやすく云うとね・・・」

「あ、こら。立ち話をするな。まだ任務中だぞ」

「じゃあ、行きながら話そう、ね」

「あ、はい。。」

そんなやりとりをしながら、3つの影が歩き始めたその時・・・

「捌」 傍目八目の 8。

「ちよーっと待てい！」

威勢のいい声が廊下のいっばいに響く。

「俺の存在、無視るんじゃないよ！」

廊下の奥から近づく紅い光を見て、夏生が舌打ちする。

「なんだ秦山^{はたやま}、いたのか」

「なんだとはなんだ。貴様！」

紅い光に照らされているのは、体格のいい大男だった。

「いや、気配が感じられなかったので」

夏生がつんけん云い返す。

「妖魔に悟られないように気配を気配を消すことは基本中の基本だろうが！ それに・・・」

秦山はびしいつと夏生を指す。

「いい加減、そのため口をどうにかしろ！ 俺はお前より先輩だったの！ どういうしつけ受けてるんだ！！」

「そんなのどうでもいいじゃないか、秦山」

「だから、俺はお前の先輩だ！ 呼び捨てするな！」

「騒ぐな。『他の』が引つ込むだろう」

もつうんざりという顔で、夏生がため息をつく。

「これぐらいで引つ込むなら、生徒会が代々妖怪退治なんてやらないだろう？」

噴火山のように熱気を上げる秦山を見上げ、アキラがポカンとする。

「妖怪退治・・・？」

「ほら秦山、あまりのネーミングセンスの悪さに、小学生が凍っているぞ」

「いや、ふつーは、現実にはありえないことだと途方にくれていると推測するだろ」

そう云うと、秦山がしゃがんだ。

その風圧に思わず目をつぶってしまったアキラが、目を開けると、目の前に秦山のごつい顔があった。

「いいか、ちび。この学校はさっきみたいな妖怪がうじゃうじゃいる。」

それを生徒会でチームを組み、征伐しているのが『文部』と、俺

たち『体部』だ。

因みに、俺はその『体部』の部長」

ふ、と夏生が失笑する。

「そこ、『因み』じゃなくて、それメインでしゃべってるんだろ、体部長。」

「んん？ 俺が自慢しているような云い草だな？！」

「その通りじゃないか」

しばらく睨み合う二人、秦山が立ち上がる。

「こんな馬鹿、相手にしていてもしかたがない。
お前、名前は何ていうんだ」

秦山に気おされながら、アキラはやつと声を出す。

「・・・アキラ、です」

「ほう。あきら、か。」

どっかの馬鹿と同じ名前だ」

にやり、と秦山が夏生を見やる。
ぎろり、と夏生が秦山をにらむ。

「馬鹿とは、全国のあきら君に失礼だ」

「それはすまないな」

「反省しているなら、目の前のあきらに土下座しろ」

「ああん?!」

鼻と鼻をくつつけあうようにして睨み合う二人の間に、アキラが割って入る。

「いえっ、僕のためにそこまでしなくていいです!!」

ち、っと舌打ちして、秦山が夏生からアキラに目を移す。

「んじゃ、苗字は？」

秦山の興味津々な視線にドギマギしながら、アキラは答える。

「苗字は・・・」

「しっ」

喃が制する。

「来たよ、新しいの」

ぴくつと夏生の耳が動く。

「秦山、」

「呼び捨てにするな」

「来る。次のが」

「ん・・・わかってるぞ、それくらい！　ちょいとやっつけてやらあ！」

「いや、やるのは俺だから」

夏生が構える。

「これは俺のだ」

夏生に向かって秦山が構える。

「俺が先に気づいた」「お前が気づく前に気づいた」

お互い一步も譲らない状況で、喃が諫める。

「くだらんことで気力を使わないでください。
全くふたりとも子供なんだから・・・」

ふ、と夏生が目をそらした。

「・・・どうぞ。」

「よっしゃー！」

ガッツポーズをして気配のする方を向いた秦山だが、ふと振り返って、びしッと夏生を指す。

「『負けるが勝ち』なんて云うなよ」

「云ってほしいのかよ」

夏生は腕を組んで憤然とする。

「よおし、来い！！」

云うなり秦山は、剣をすらりと抜いて構えるようなしぐさをした。手には何も持っていない。

「あのハタヤマさんも、ナツミさんと同じように、呪文で妖怪を倒すの？」

アキラが、傍らの夏生に聞く。

「いや、あいつは『剣』だ」

秦山から目を離さずに、夏生が答える。

「亡者——お前の云う『妖怪』は、よほど攻撃的なものでない限り、こんな闘志バリバリのWelcomeな雰囲気のところには出てこない」

「じゃあ、今来る妖怪、いや、モウジャって、すつごく攻撃的なもの？」

「ああ、そうらしい。このまま、こちらに来なければいいのだが・・」

夏生らしからぬ気弱な発言に、あれ？？とアキラは首をかしげた。

「秦山を始めとする『体部』が相手にするのは、そういった超凶暴なモンスター系とみなされた亡者たちだ」

夏生が、ふっとアキラを見た。

「云つとくけど、俺は亡者を倒すことはしないし、妖怪とも思っていない」

その目があまりに無表情だったので、アキラはぞつとして頷くこともできなかった。

そんなアキラから視線を上げて、夏生は呟いた。

「ちつ、来た」

かさこそと闇の中から音が近づいてくる。

秦山の炎が、ぐわつと燃え上がる。

その紅い光に照らされたのは、天井にしがみついてテカテカ光る、等身大の大きなゴキブリだった。

その頭に、乱れたおかつぱの童女の顔が付いている。

思わず夏生にしがみつくアキラ。

食い入るように、津々と見つめる夏生と喃。

そして、武者震いをしてニヤリと笑む秦山。

ゴキブリの体である童女は、白目をむいたまま、ぶつぶつと何かを呟いている。

しかし秦山は、その呟きに耳を傾けない。

童女がゴキブリの肢を動かすと同時に、秦山が彼女を指した。

そのとたん、女がぐぐもった声を上げ、肢を引っ込める。

様子がおかしい。

全ての肢をばたつかせているのにも関わらず、その体は天井から落ちてこない。

まるで、生きながらゴキブリの標本になったかのようなだった。

「ハタヤマさんの『剣』は見えないんだ」

アキラの漏らした言葉に、夏生がほほうと感心する。

「そうだ。やつは気力で『剣』をつくり、操る」

「そう、俺の宝刀に敵^{かな}う奴はいないぜ！」

夏生とアキラの会話を耳に挟んで、秦山が振り返る。

「お前含めてな！！」

「いいから、前向け。」

向き直る秦山の背中を見ながら、夏生が腕組みをしたまま呟く。

「『妖怪』を切り殺す・・・『体部』の輩はそういう倒し方をする」

見上げた夏生の顔は、悲しげだった。

秦山はすつと腕を引き、童女に向かって十字を切る。

その腕の動きと共に、彼女の体がぱっくり割れる。

見えざる剣に裂かれた彼女の体は、断末魔の叫びを残して、廊下の床に崩れ落ちた。

「ひゅうつ♪ いつちよあがり！」

再びガッツポーズをとる秦山の後ろで、夏生が目を閉じて、静かに「エン」と唱える。

童女の体が炎に包まれ、焼き尽くされる。

しかし、先ほどのように、光が出てくることはなかった。

「ま、こんなもんだ」

得意顔で秦山が振り返る。

「それくらいで自慢するなよ、体部長」

「・・・すごいですね。あつと云う間だ・・・」

「まだまだよ」

喃が目をぱちくりさせて、三人を見上げる。

「まだまだそうだ」

夏生が秦山に釘を刺す。

「まだ、いっぱいくる」

「ええっ、まだいるの？」

アキラが不安げに夏生を見上げる。

「聞いたろうっ。」

この学校にはうじゃうじゃ出るって」

アキラをもっと不安にさせるのを楽しむように、夏生はニヤリと笑った。

「玖」 九鼎大呂の 9。

しん、と静まる校舎の奥から、細波さざなみのような音が響いてきた。
アキラがやってきた方向からだ。

「来るぞ」

秦山が大きな体をぶるりと振るわせ、ため息をつく。そして前方を
睨む、が、はつと我に帰って、後ろの夏生を振り返る。

「今のは武者震いだからな！」

「いちいち云い訳がましい奴だな」

音は上から下から、様々な方向から合流しながら、近づいてきてい
る。

近づくにつれて、その音は「かさこそ」という音が何十にも重なっ
ているものとわかる。

「かさこそ」——そう、先程のゴキブリ女の足音だ。

「すげえ数だ」

舌なめずりする秦山。

「じじじじ、」

声とともに、しゅたっ、と秦山の前に人影が降り立った。
ふわり、と長い黒髪が白シャツにかかる。
それは、長身でほっそりとした、狐目の男だった。

「お前たちで相手できる数じゃないだろう」

男は左手で眼鏡をくいつと直した。

その顔の横には白い炎が浮いていた。

「佐原先輩さわらっ」

夏生の目が煌めく。

「夏生、結界を張れ。」

ここは一旦やりすごして、他の奴らも呼ぼう」

「はい」

佐原には素直な夏生を見て、秦山が舌打ちする。

「ま、それが賢明だな。」

さすがは文部の参謀を自称するだけはある」

「秦山くん、君はもっと冷静になりたまえ。
うちの新人にもしものことがあったらどうしてくれるのだ」

「はんっ、そっちに預けたうちの新人はどうしたんだよ。
自分ちの坊やがピンチで、よその子はほっぽらかしか？」

「秦山先輩、僕は後ろにいます」

「わっ」

秦山が飛び上がって見返ると、背の小さい、色黒な男子生徒が口を尖らせていた。

「わるいつ！」

かたくち
片口、そこにいたのか！！」

「いました。

気配を消すのが基本中の基本ですよね、先輩」

ぷつと夏生が吹き出す。

ぎろりと秦山が睨む。

「片口、螢火で大瀬おおせたちにも連絡してくれ」

「はい」

片口は、傍らに浮かぶ緑色の炎に向かって息を吹く。

すると、夏生、秦山、佐原の炎が、燃え上がり、片口の炎の方に吸い寄せられた。

「？」

炎を見て首を傾げるアキラに、喃が解説する。

「あの炎は、明かりになると同時に、炎を持つもの同士の通信機の役割を果たすことができるんだ」

「懐中電灯つきトランシーバーみたいなもの？」

「うーん、外れてはいないけど、不正解。

この炎は人間以外のものが見ることができない明かりなんだ。だから、この明かりで妖魔に気づかれることはまずない。

そして、通信機能についてなんだけど、炎の発する気炎を介して仲間の状況が視覚的・聴覚的・嗅覚的に把握することができんだ。だから、トランシーバー以上の優れもの」

そんなやり取りの間にも、音は近づいてくる。

ぞぞぞぞぞぞ……

振動が、廊下の床を伝う。

音は廊下の角まで迫っていた。

夏生が指を組んで、一言発した。

「ちエン」

キン、と鼓膜に膜が張ったような感覚がして、アキラが頭を振る。

「今、夏生が結界を張った。

俺らから離れるンじゃねえぞ」

先方を見据えたまま、秦山が忠告する。

「秦山、灯りを消せ」

「灯りはあっても関係ないだろう」

振り向いた秦山に、震えるアキラにしがみつかれた夏生が、ぶつきらぼつにもう一度云う。

「灯りを消せ」

秦山が口の端を上げる。

「へえ、意外にいいところじゃん」

「いいから」

夏生は怒った声を出す。

「見えざる気配を感じるのも、基本中の基本だったか」

秦山が炎に向かって呪を唱える。

しかし、炎が消える前に、アキラは見てしまった。

おびただしい数のゴキブリ少女が、廊下いっぱいに這い出してくるところを。

「拾」 十中八九の10。

「ジエジエ、プふ！」

おかしい呪文だが、夏生が真顔で気合を入れる。

その直後、轟音が一行を襲った。

鼓膜がびりびり震え、体が揺さぶられる。

まるで、電車が何十列も通る高架線の下にいるようだ。

バチっ、バチバチっ

結界に触れたゴキブリ女が、時おり火花を散らす。

その火花が、フラッシュモーションのように、おぞましい大群を照らす。

アキラは夏生の背中に顔をうずめていた。

やがて、音が治まり、アキラは顔を上げた。

かさこそ・・・かさこそ・・・

群れから遅れている何匹かが、そばを通る音がする。

「・・・なんか、云ってるよ」

アキラの言葉に、夏生以外の一同が振り向く。

「あの人たち、何か云いながら、進んでなかった？」

アキラは同意を求めるように、秦山、佐原、片口の顔、そして夏生の背中を順々に見た。

「俺は何も聞こえなかった」

と、秦山。

「もしかしたら・・・これが”分裂型”であることを考えると・・・

」

考え込む佐原。

「”分裂型”？」

アキラは喃に説明を求める。

「一つの妖魔——例えばさっきの蛇女やゴキブリ女みたいに、人の形を保てなくなった霊体のことなんだけど——の体が、何らかの原因で、2つ以上の霊体に分裂したタイプのこと。

手や足とか体のパーツがバラバラに独立することもあれば、全く同じ形の体がいくつもできるものもある。

いまのやつは後者だね」

「ふーん……いろいろいるんだなあ」

アキラと喃が会話しているうちに、秦山たちの話も進む。

「これだけ多くの分裂体が、統一された行動をとることは滅多にない。

おそらく、外部の何がしかの思考に影響を受けたものと思われる」

「だよな。いつだっけ、前にも似たようなことがあったよな」

「その話は瀬先輩から聞きました。

『理科準備室・冷蔵庫襲撃事件』ですよ」

片口が口を挟む。

「冷蔵庫襲撃事件？

なんですか、それ？」

アキラが片口にたずねる。

「何年前か、真夜中に理科室の冷蔵庫がメタメタに破壊されたこと

があつたんです。

それは妖魔の仕業でしたが、原因は私たち夜回り組みにありました。

ある夜回り組みが、任務中に雑念を抱き、たまたま近くにいた分裂型妖魔の一部が影響を受け、同じ型の妖魔が冷蔵庫に殺到してしまつたらしいんです」

まだ納得のいかない顔をしているアキラに、喃が補足する。

「分裂型は、分裂すればするほど、自分の意思は弱くなり、周りの思考の影響を受けやすくなる。体が増える分、頭の中が薄くなっていくんだ。

普段はそれぞれの個体はバラバラの行動をしているんだけど、彼らの精神は基本的に同一で、例えば一つの個体に強い刺激を与えると、その情報は同じ体から分裂した全個体に共有される。

同じ理屈で、強い思考が一個体に入り込むと、全個体がその思考に支配されてしまうんだ。」

「因みに冷蔵庫襲撃事件きっかけの雑念とは、『アイスが食べたい。理科室のあの冷蔵庫にありそうだ』ってやつだ」

夏生がにまりと笑む。

「うわあ。

じゃあ、任務中は何も思っちゃいけないんですね」

アキラが両手で頭を押さえる。

「そついうのに備えて、俺らは雑念なんか抱かないように訓練して

いるのさ」

ふふんとふんぞり返る秦山。

それをスルーして、佐原が本題に戻す。

「そう、その冷蔵庫事件の際に、妖魔たちは『冷蔵庫』、『理科室』、『アイス』などと口にしながら突進していったそうだ。これはそのときと同様の異常事態と見て、早急に対策を立てるべきで、その対策の鍵が、この子供の聞き取った、彼らの声にあるだろう」

「なら、先輩。僕に一匹しとめてさせください」

申し出たのは片口だった。

「奴らの動きはすばやくて、聞き取りにくいです。一匹しとめて、奴らが何か云っているのか確認しましょう。念のため。」

「・・・そうだな」

佐原はあごに当てていた手を眼鏡に持っていた。

そんな彼の様子を見つめているアキラに、喃がささやく。

「生け捕りは、文部にとって残酷な行為なんだ。

文部は、妖魔が人間の一部だと思っているから・・・」

なるほど、とアキラは納得した。

だから、先ほどから夏生が秦山たちに対して冷たい態度なんだ。

しかし、蛇女と戦うときに見せた、あのキラキラした表情は何だろ
う……？

「では、片口。

君に、妖魔生け捕りの許可を下す」

佐原がやつと決断を下した。

「はいっ」

返事するや否や、片口はひょいと夏生の前に飛び出した。

同時に、一瞬だけ周りの空気がゆがんだ気配がした。

「片口が結界の外に出たんだ」

喃がアキラに解説する。

「大丈夫なのかな」

心配するアキラの肩を、佐原が優しくたたく。

「大丈夫さ。

彼は僕らの中で一番すばしっこくって、正確な動きができる奴だ
から。

もう明かりをつけていいよね」

佐原の白い炎があたりを照らす。

すでに、片口は来るべき獲物に対して、構えていた。

弓を引くような構えだ。

かさこそっ

音がした方角へ向け、肩まで引いていた手の手のひらを、パツと開く。

すると、廊下の奥でどさりとモノが落ちる音が響いた。

緑色の明かりが高く灯って、音の正体を照らす。

やはり、ゴキブリ女だった。

仰向けになり両手両足をうごめかせている。

片口とは、教室3室分離れていた。

彼の武器は弓矢で、秦山のように目に見えないものであるらしい。

しかし、これだけの距離で、暗闇の中、正確に標的を射抜くとは、驚きである。

アキラは生唾を飲み込んで、片口の背中を見つめた。

「夏生、あのあたりまで結界を引っばっていつてくれ」

「了解です」

全員がゴキブリ女の近くに移動した。

片口が口元に人差し指を当てる。

「急所ははずしてあります。

耳を澄ませば、あの妖魔の声が聞こえるはずです」

佐原がうなずく。

アキラも秦山も耳をそばだてる。

『・・・ちょ・・・しっ・・・』

微かだが、声が聞こえる。

皆、全身を耳にして聞き入る。

『・・・じっ・・・ちょ・・・しっ・・・』

聞き取れたのは・・・

「校長室！」

秦山、佐原、片口、夏生が一斉にはっと顔を見合わせた。

「校長室と云ったな！」

「行くぞ!!」

云うなり彼らは駆け出した。

アキラは小脇に抱えられ、宙を猛スピードで進んでいた。

顔を上げると夏生の必死な形相があった。

「大瀬、大瀬っ、聞こえるかっつ!

校長室前厳戒態勢だっつ!!」

この一行の中で一番落ち着き払っていた佐原までもが慌てている。

校長室前に行くと、とんでもないことが起こるみたいだ・・・

アキラは本能的に感じ取った。

それくらい彼らの様子は鬼気迫っていた。

一同の懸念をそよに、ゴキブリ女たちの足音は遠ざかっていく。

『あててて。着いたよ、校長室前・・・うげっ
なんじゃこりゃあ!!』

炎から声が聞こえる。

「大瀬、そいつらを校長室に近づけてはならない!!」

佐原が走りながら炎に向かって怒鳴る。

『えゝ、無理だよお。』

僕無力だし、一緒にいるの追河だし・・・』

なんとも頼りないなよなよとした声である。

「そうだ追河っ、あいつはショートカットができるぜ！ はっ！！」

気合一発、秦山が炎を灯す。

「追河、聞こえるか！？」

1 - 5 から校長室前、ショートカットだ！！」

秦山が炎に向かって叫んだとたん、頭に金槌で殴られたような衝撃が走った。

はっとアキラが気づくと、一行は重々しい木の扉の前に立っていた。

扉の横には「校長室」とネームプレートが下がっていた。

アキラたちは一瞬にして、教室前から校長室に来たことになる。

あゝあゝあゝあゝあゝ・・・

聞き覚えのある音がしているのに気づいて、アキラが首をひねると、あのゴキブリ女たちの大群が迫って来るのが見えた。

「ダメだ！ 間に合わない！！」

「諦めるな！！」

「何としても阻止せねば！」

しかして大群は、ついに校長室前に来てしまう！

「喃、こいつを連れてけ」

夏生がアキラを廊下に放り出す。

「さ、アキラくん。こっちへ」

喃の後に続こうとして、振り返る。

一同は、校長室の扉を背に、大群に向かって構えていた。

先ほど、勝ち目がない、他の応援を呼ぼうと云っていたメンバーで、妖魔の大群に立ち向かおうとしているのだ。

このままじゃあ、おそらく、かないっこない・・・！

アキラが夏生たちに駆け寄ろうとした瞬間、校長室の扉が突然開いた。

「巻」 一喜一憂の 11。

扉が開くと、まばゆい光が廊下に差した。

「はあゝい、えヴリばあでいゝ→」

校長室の中から響いてきたのは、底抜けに陽気な男の声だった。

声の主を見ようと振り向いたアキラは、校長室の明かりがあまりに眩しくて、目を細める。

だんだん目が慣れてきて、見えたものは・・・孔雀のように煌びやかに着飾った男だった！！

どこか南国調の雰囲気を纏い、極楽鳥とまがうほど派手派手な格好をしたその男は、怪しげなダンスを踊りながら校長室から出てきた。

リズムカルなステップ、軽快でラブラーな腰つき、切れのある手さばき、暑苦しいほどの情熱を秘めた眼差し。

これらが全て、この男が只者でないことを物語っている。

異様な雰囲気、アキラは2、3歩よろめいた。

この妖しげなお尻プリプリダンスを見てみると、スパニッシュな音楽で頭が満たされていくようだ。

妖魔たちのほうを見ると、彼女たちも奇妙な孔雀男に気おされて、後ずさりをしている。

男が腰をくねらせながら一歩踏み出すと、彼女たちは1、2歩下がる。

丸腰の男に対して、猛獣の群れが引いていく・・・そんな異様な光景である。

この男、いったい何者だ?!

呆気にとられているアキラを、夏生がひょっとと抱え、校長室に駆け込む。

室内には、恐る恐る外をうかがう片口たちがいた。

皆、顔面蒼白だ。

「出てきちゃったよ、あああ・・・」

頭を抱える秦山。

「出てきちゃったよ、校長が・・・」

アキラは目を見張った。

「え？ あれが校長?！」

「正確には校長じゃない。俺たち夜回り組みの担当教員・・・」

夏生が睨むようにして踊る男を見据える。

「いわば”裏の”校長さ」

「校長、もういいです!」

佐原の怒鳴り声が聞こえる。

「さわらちゃん、そんなにカリカリしなくていいじゃん←←」

ぷりりっとお尻を振りながら、『校長』が答える。

「もう、これだから。執行部は要らないのよね。私だけでじゅ・う・ぶ・ん」

彼のウィンクに、ぞわわつと妖魔たちが引く。

「あの校長先生、無敵じゃないですか」

様子を見ていたアキラが夏生を見上げる。

夏生は冷たい表情のままだった。

「あの雰囲気は妖魔どころか、人間さえ寄せ付けない」

「だからこそ・・・」

片口が口を挟む。

「いや、校長の場合、副作用があるんだよ」

「副作用？」

「そう。彼のオーラは凄まじく強烈であるため、半径5メートルにいる者の意志を殺^そぎ、無気力にする。

しかし、いったん彼に無気力にされた者は、
オーラの影響がなくなったとたん、
抑えられていたバネが反動で爆^はぜるように、
俄然やる気を起こしてしまう。

これが彼の副作用だ」

「じゃあ、校長の近くにいた妖魔たちが、後ろに引きすぎると・・・

」

と、アキラが云いかけると、夏生が校長を指差す。

「あんなふうになる」

見ると、ゴキブリ女たちが羽を羽ばたかせながら、校長の方へ飛び込んでいたところだった。

「5メートルより外に出たら、闘志バリバリだ。
あれなら闘志が尽きる前に、重力にしたがって
校長に突っ込むことが可能だろう。」

「なるほど・・・って、なに冷静に眺めているんですか!!」

アキラが夏生のシャツを引っぱったとたん、校長めがけて突っ込んでいた女たちが壁に打ち付けられた。

見えない矢の使い手、片口の仕業だ。

「校長、早くこちらへ!」

片口が云っているそばから、校長、そして校長室に向かって、次々に女たちが飛んでくる。

片口が矢で打ち落とすだけでは追いつかない。
秦山も剣を振るっている。

「もう、しょうがないんだからあん」

腰をフリフリ、校長が校長室に向かう。

「どけ」

夏生が校長室の扉の前に出る。

入れ違いに片口、秦山がさつと室内に引込む。

彼らの後を追うように、女たちが校長室に迫る。

それを見計らい、夏生が指を組んだ手を高く掲げる。

そして、言葉と共に腕を振り下ろす。

「ふエンっ」

夏生から突風が起こった。

爆風に煽られて、女たちが吹っ飛ぶ。
それを見届けて、夏生も室内に戻る。

「今だ。」

入ってくる前に閉める」

夏生の号令で、校長室の扉が閉じられる。

「ふう、やれやれ」

扉にもたれて、秦山がため息をつく。
アキラも胸をなでおろす。

と、後ろから震え声がした。

「君たち、気がついているのかね……」

後ろを見ると、蒼い顔をした佐原が目に入る。
額には青筋が浮いている。

彼は、怒りで震えた声で云った。

「外に……校長を締め出していることに」

「巻貳」 二者択一の 12。

「あ！ 校長のこと、忘れてた・・・」

固まる一同。

その時、彼らの背後、すなわち校長室の扉の方から、呼びかけられた。

「ようこそ！ 満咲高校校長室へ」

それは校長の声だった。

室内に声が朗々と響くけれども、その姿は見えない。

「どこだ!?!」

皆がきよろきよろしていると、再び頭上から声が降ってきた。

「ここここ。上よおくん」

一同振り仰ぐと、視線が釘付けになる。

そこにはシャンデリアのごとく、キラキラと光を放つ塊が張り付いていた。

まず目に付くのが、大きな金色のマント。

スパンコールやら金系の刺繍やら、豪勢な装飾が施されているサテン生地が虹色に輝いている。

それを、モモンガのように手足で広げて、ぴったりと壁につけ、^と鶏冠のように立てた銀色の髪につけたジェリーをキラキラとさせ、ラメでぎつとり固めた長いまつげをしばたかせ、一行をキラキラと見つめる熱視線。

校長だった。

「どうしてここにいるの？って顔ね。
知りたい??」

がっちりアイメイクの熱視線を向けられ、アキラはガクガクと首を縦に振った。

「なつみちゃんの起こした風を利用して、ひゆるんとここに入り込んだの。」

今日のファッションのテーマは”自由に羽ばたく鳥”。
たくさんの風を受け止められるようにしたのよ」

「それにしても、よく気流に乗れましたね」

佐原がずり下りた眼鏡をようやく直しつつ、言葉を発した。

「大量の妖魔がやって来る

+

めんどくさがりの夏生が来る

←

爆風で一氣にカタをつける

ということは、夜回りベテラン担当教員である私が見抜けないはずがないでしょ」

「はあ、そうなんですか・・・」

片口が感心している。

秦山はむすくれている。

「というか、さすがはなつみちゃん。

私が入り込むのをわかってて、あの技使ったんでしょ」お」

校長は無表情な夏生にウィンクする。

夏生はやはりたじろがずに云い返す。

「いえ。

今日のテーマが『大木』だと思って、風にしました」

「まあ、そんなりりしかった、私？

それから『（妖魔が）入ってくる前に閉める』って的確な指示、かつこよかったわ」

「『（校長が）入ってくる前に閉める』と云ったつもりだ」

「もっおん、なつみちゃんたら照れ屋さん」

今度は両目で何度もウィンク。

さすがの夏生も目をそらした。

「それで、そのおチビちゃんは？」

「カマトトぶつてもダメです。

校長ならわかるはずですよ」

ぶつきらばうに夏生が答える。

「今夜は一段と夏生に絡みますね、校長」

延々と続く夏生と校長の会話に、佐原が割って入る。

「これが絡まずにおられましょうか？」

意味ありげに夏生にウィンク。

そして、アキラにはそばのソファを指して、またまたウィンク。

「ま、そこに座って。

冷たいものでも持ってくるわ。

もちろんみんなにもね」

煌びやかなマントを翻して軽やかに着地すると、部屋の奥に消えていった。

そう云われて気づいたが、アキラは喉がカラカラだった。

そして、この部屋は春にしては異様に暑い。

蒸すような暑さだ。

これじゃまるで・・・

「はい、レモネード」

校長の声で我に返る。

汗をかいた冷たいグラスが手渡される。

見上げると、おじさんがにっこり笑っていた。

一瞬わからなかったが、校長だ。

メイクをすっかり落としたので、同一人物とは思えない……尻を振る歩き方ではわかるが。

グラスをなぞると、半透明の水の中に、レモンの果肉が涼しげにくるくると泳いでいるのが見えた。

「そんなじろじろ見なくても大丈夫よお」

顔を上げると、校長がデスクにひじを着いて、アキラをうつとりと見ていた。

アキラは慌ててレモネードを飲み干した。

飲み終わって恐る恐る校長の方を見ると、もう彼はアキラを見つめておらず、栄養ドリンクを飲んでいた。

改めて校長室を見回すと、けっこう簡素な部屋であることに気づいた。

四方の壁の横一列を埋めている歴代の校長の肖像画がなければ、どこかのオフィスの一角、そこそのホテルの狭いロビーのようだった。

アキラたちが今いる応接室の奥には、セパレーションを透かして、台所と洗面所が見える。

部屋はいわゆる１LDKで、普通に暮らせるほどの広さがある。

続いてアキラは、思い思いの格好で休憩している、妖魔退治の面子を見回した。

隅っこにしゃがんでチビチビとレモネードをすすっているのが片口。彼にのっかかり、目を閉じて口を開けて居眠りしているのが秦山。

それを呆れた顔で眺めているのが大瀬。

その対角の壁にもたれて、眼鏡を拭いているのが佐原。

そして同じく壁にもたれて空のコップを弄んでいるのが夏生。

明るいところで見ると、皆、今しがた妖魔と戦っていたとは思えないような、普通の高校生だった。

ここだって、見た目は普通の高校だ。

それがどうしてこんな、モンスターだらけの

化け物屋敷になっちゃってるんだ？

しかもどうしてこんな、僕が巻き込まれてしまっているんだ？

そもそも僕は・・・

かり

かり

扉の向こうで、何かが——といっても妖魔しかいないのはわかってはいるが——つめで引かく音がして、アキラは思わずそちらを振り返った。

かりかり・・・がりがりがり

扉はびくともしないが、音はひどくなる。

学生たちの方を見ると、彼らは、まるでその音が聞こえていないか

のように、のんびりとくつろいだままだった。

「大丈夫よ、アキラちゃん。

そんなに眉間にしわ寄せなくても。

入ってきはしないわ」

気づくと、校長が笑みを浮かべてアキラを見ている。

アキラは思わず下を向く。

なぜか、顔がカッと熱くなっていた。

「なつみちゃん」

校長の呼びかけに、夏生が顔をしかめ、しかたなく扉の方を見やつて口を動かした。

音がぴたりと止んだ。

「ね、大丈夫でしょ？」

にっこり微笑む校長。

どうやらここは安全な場所らしい。

（聞くなら今だ）

決心して、アキラが顔を上げる。

「あの、唐突でスミマセンが・・・」

夜回り組みの生徒が環視する中、アキラはやや緊張気味にしゃちほこばって校長に尋ねる。

「この学校って、いったいどうなっちゃってるんですか？」

そんなアキラを見つめながら怪しげな笑みを浮かべ、校長が聞き返す。

「知りたい？」

「はい」

アキラが頷くのを見て、校長は、この上もなく満足そうに微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0232b/>

<お試し版> 満咲高校騒乱記

2010年10月11日11時51分発行